松坂屋 京都染織参考館

平成24年6月2日（土）→8月28日（火）

江戸初期、呉服店から出発した松坂屋は、百貨店に転業後も創業の精神を忘れることなく、呉服に力を注ぎ続けた。その「呉服の松坂屋」の最前線を担ったのが京都仕入店であった。
昭和6（1931）年、呉服の図案の参考資料として、それまで収集していた時代衣装、裂地を保管するための染織参考室（土蔵造り）を京都仕入店内に設置した。
小袖、能装束、振袖、帷子（かたびら）、陣羽織などの衣装、古代裂（ぎれ）、コプト裂（ぎれ）（エジプト）、インカ裂（ぎれ）（南米）、更紗（インド）などの裂地（きれじ）、その他雛形本、能面、屏風、甲冑など、多種多様な美術・工芸品を、昭和14（1939）年にかけて集中的に収集し、3つの土蔵に収蔵した。
そして昭和32（1957）年、民間随一といわれるコレクションを永久に保存するため、鉄筋コンクリート造り、送風、空気清浄、温湿度調整など科学の粋を集めた近代的な「染織参考館」を建築した。

京都仕入店

松坂屋の前身「いとう呉服店」の歴史は、織田信長の家臣であった伊藤蘭丸祐道が、約400年前の慶長16（1611）年、名古屋の本町に呉服小間物問屋の暖簾を掲げたときに始まる。
元文元（1736）年、呉服太物小売業に業態を転換。正札販売「現金掛値なし」の新商法が功を奏して、尾張藩の呉服御用を務めるまでになった。
そして延享2（1745）年、京都室町錦小路に高級呉服の仕入れの店舗を構えたのである［4年後の寛延2（1749）年、新町通六角下ルへ移転］。
何度か火災に遭ったが、その都度再建し、260年にわたって呉服の仕入れを続けた［平成22（2010）年に撤退］。

松坂屋京都仕入店

京都仕入店和室

「掟書」（躾誡録）（寛延4年制定）

京都染織参考館

昭和6（1931）年10月、松坂屋は「時代衣装を収集し、染織意匠の向上と優秀呉服の制作に資する」ことを目的に、京都仕入店内に染織参考室を設置した。
以後、昭和14（1939）年まで集中的に収集を行い、1万数千点を収蔵するに至った。加賀前田家をはじめとする旧大名家、洋画家・岡田三郎助、染織工芸家・岸本景春などが主な購入先であった。
代表的なものに、平成23年6月27日に国の重要文化財に指定された慶長小袖「染分綸子地御所車花鳥文様繍箔小袖」、徳川家康着用「葵紋に飛蝶文様胴服」などがある。そして昭和32（1957）年、コレクションの永久保存を目的に、送風、空気清浄、温湿度調整など科学の粋を集めた近代的な宝物殿ともいうべき染織参考館を建築した。

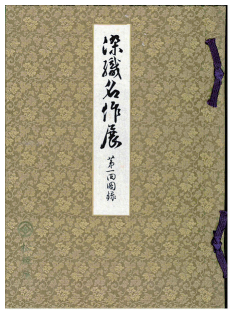
京都染織参考館

重要文化財指定・慶長小袖
「染分綸子地御所車花鳥文様繍箔小袖」

「染織名作展」

百貨店が百貨店らしく変貌を遂げていった昭和初期、一方では伝統的な染織の技を駆使した最高級の呉服の制作が求められていた。そのためには第一級の資料と技術者が不可欠であった。
松坂屋は、昭和6（1931）年から小袖など時代染織品の収集を積極的に行なうとともに、染め、織り、絞り、刺繍などの分野で優秀な技術を保持していた生産問屋（京都の千總商店、岡本恒三郎、片山文三郎、矢代仁商店、東京の野口巧造、野口眞造の6社。のちに川島織物、千切屋治兵衛も参加）の協力を得て、高級呉服の制作を行い、「染織名作展」として帝国ホテルなどで発表した。
「染織名作展」は、のちに「松坂屋に過ぎたるもの」と称えられるようになる。

会社創立50年記念「染織名作展」（昭和35年、帝国ホテル）



第1回「染織名作展」図録

呉服催事

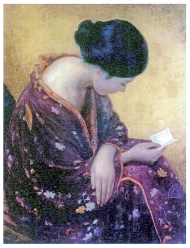
江戸初期、呉服店からスタートした松坂屋は、百貨店に転業した後も看板は呉服であった。
呉服では、催しにも力をそそぎ、名物といわれた「染織名作展」以外にも、「名織展」「流行会」「時代衣裳鑑賞会」「染織むらさき会」など、様々な呉服の催事を企画し、全店規模で展開した。
また、「名松会」（名古屋店）、「銀柳会」（銀座店）、「静美会」（静岡店）など、各店独自の催事もあった。
これらを開催するにあたり、染織参考館収蔵の小袖や裂地の文様をデザインの参考にしたのである。

「名織展」図録

「時代衣裳鑑賞会」図録

岡田三郎助の名画と松坂屋コレクション

「婦人像の岡田」といわれ、明治、大正、昭和の三代に亘って画壇に重きをなした洋画家・岡田三郎助は、時代衣装のコレクターとしても知られる。
松坂屋が、昭和9（1934）年にその岡田から購入した時代衣装は130領にのぼる。
このなかの「緋縮緬松竹梅香袋文様小袖」（江戸初期）、「浅黄絽地藤に垣桜文様小袖」（同）、「納戸縮緬地八ッ橋文様小袖」（江戸中期）、「紫縮緬地檜扇蔓牡丹文様振袖」（同）、「緋縮緬地垣に熨斗葵文様小袖」（同）が、岡田の5作品に登場する。
岡田芸術の真髄は、松坂屋染織参考館に残ったのである。


「来信」

「紫縮緬地檜扇蔓牡丹文様振袖」
（江戸中期）

「あやめの衣」

「納戸縮緬地
八ッ橋文様小袖」
（江戸中期）

祇園祭

東京の神田祭、大阪の天神祭とともに、わが国の三大祭の一つに数えられている京都の祇園祭は、平安初期の疫病はらいである祇園御霊会が起源。千年の間、応仁の乱などでいくども中断を余儀なくされたが、町衆の努力によって、そのたび復興をとげてきた。
この祇園祭と松坂屋との関わりは、江戸時代までさかのぼることが出来る。「団栗（どんぐり）火事」とも呼ばれる天明8（1788）年の京都大火の際に、新町通六角下ルの山鉾「北観音山」が焼失し、松坂屋の京店も類焼した。このとき松坂屋は、同じ町内にあった三井家とともに多額の寄付を行ない、地域の山鉾の復興に尽力をしたことが記録に残されている。

祇園祭の「北観音山」（右が松坂屋京都仕入店）

Matsuzakaya
松坂屋・名古屋店
電話(052)251-1111 www.matsuzakaya.co.jp
【営業時間】本館地下2階～3階、南館地下2階～4階、北館1階は10時→20時　その他のフロアは10時→19時30分　ただし、本館9・10階、南館6・7・10階、北館地下1階で営業時間が異なる店舗もございます。